

# オーストラリア英語の特徴

横瀬 弘幸

Features of Australian English

Hiroyuki YOKOSE

## Abstract

初めてニュー・サウス・ウエールズ (New South Wales) に植民地の基礎を築いた1788年から、今日までのオーストラリア英語の特徴を述べてみたい。

1. では18世紀入植以後、特に話し言葉のレベルで使われてきた語彙や俗語表現の中にみられ、現在に至り用いられているものを集めた。2. ではオーストラリア英語とスラングを形態的にみる。3. ではイギリス英語との間に存在する文法的差異を示し、口語レベルで、イギリス英語と比較してみる。

初めてニュー・サウス・ウエールズ (New South Wales) に植民地の基礎を築いた1788年から、今日までのオーストラリア英語の特徴を述べてみたい。

18世紀、19世紀の言語状況は現在と比べるとはるかに単純であった。海外で兵役にしている彼等の俗語は、借用したり、されたりしながら、アメリカ、イギリス、など、外国軍人の俗語と混ざり合ってきた。さらに、いろいろな英語圏の国家間の通信機関が発達してくるにつれて、方言から方言への借用がますます増大して、英語圏に共通している語彙を拡張し、豊かなものにした。20世紀のオーストラリア英語の言語状況は、19世紀に比べると、より複雑で異質のものとなっている。

アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなどそれぞれ国の英

語表現があるが、これらの国で英語が活字になると、どの国の人が書いたものか色別には難しい。ところが話したりするとすぐわかる。ということは、発音の相違と独特の表現にあると思われる。あるオーストラリア人学者は次のように述べている。『この地球上、オーストラリアほど広大な地域で方言の存在しないところは、ほかにない』彼ら同士お互いの出身地は、言葉のうえからはまったく分らないという。まさに驚くべき大きな特徴である。

ではオーストラリア人は皆同じ英語を話しているのか、同じ発音をしているのかというと、じつはそうではない。同じ英語・発音をしてはいない。どの地域にも様々の発音が混在するという特徴がある。それらは、通常次の3つに分類される。多数の話者が使う形を

多い順にあげると、一般オーストラリア英語 (General Australian)、次に、ブロード・オーストラリア英語 (Broad Australian)、より少数派の教養あるオーストラリア人が使う (Cultivated Australian) がある。最初の General Australian はイギリスの一般市民の英語に近く、70% がこれを使用している。Cultivated Australian は品格があるとされ、人口の 20% がこれを使用している。Broad Australian はオーストラリアなまりの強いもので、ロンドンの Cockney に似ていると言われる程で、10% の人が使用している。

ドーシュ氏 (Mr. Dorsch) が言っているように、あるオーストラリア人は英国南部英語の発音を身につけて自分たちの言葉をオーストラリア英語の特徴から逃れようとしている。多くの人たちは、我々は教養ある英国南部の発音を標準とすべきであると考えている。英国南部英語発音を採用したいと思っているオーストラリア人は、オーストラリア英語発音の特徴に見合う著しい変化だけを取り入れ、他の点に関して彼らは完全にオーストラリア流に発音する。要するに、彼らはいろい混じった発音を使う。

一般オーストラリア英語の言葉は最も特徴ある英語の形式である。一般に広くオーストラリアにおいて見られるが、オーストラリアだけにしか見られないということではない。教養あるオーストラリア英語の言葉は女子学生の間で見られる。その使用は専門職や商業を営む人たちが多い。中・高校の教員は一般オーストラリア英語 (General Australian) を話す。ということは一般オーストラリア英語の使用する割合は確実に増えるものと考えられる。『教養あるオーストラリア英語話者は、ある番組では一般オーストラリア英語の使用を認め、また勿論、普通の市民が自分たちの言葉で喋る番組では 3 変種共総て受け入れる

のだが、一般の放送で自分たちの使っている言葉の変種が使われているものを当然聞きたがっている。あらゆる階級のオーストラリア人とのインタビューで、放送局は一般オーストラリア英語とブロード・オーストラリア英語の声をしばしば大衆に流した。国会の実況中継放送では、教養あるオーストラリア英語は、一般オーストラリア英語のいずれよりもずっと使われていない』<sup>(1)</sup>

一方特徴あるオーストラリア英語が今日のように定着するように至った経緯を考えると、オーストラリア英語の話し方は、『国民的な劣等感あるいは心理的な抑圧によって生まれたものだ』という意見がある』<sup>(2)</sup>

しかし、どのようにしてオーストラリア人が用いる英語を生み出したのかを例証するのは容易なことではない。そして、アボリジニー語が影響したことはいうまでもない。

アメリカ人の書いたものの中に『彼らの英語はロンドンの街角で聞く英語に大変似ている』とあり、アメリカ人からしてもイギリス英語に近いことがわかる。

イギリス人にしてみればオーストラリア英語はすぐ理解できる。又、オーストラリア人学者は、『この地球上、オーストラリアほど広大な地域で方言の存在しないところは、他にない』と言う。確かに、出身地などは言葉の上からでは同じオーストラリア人でも分らないという。

デイニング氏は、著書『オーストラリアの風景』(The Australian Scene) の気候に関する章の中で、オーストラリアの発音について述べている。「オーストラリア人のだらしのない言葉が気候による身体的なだるさと結びついていることは疑いのないことである。」<sup>(3)</sup> しかし、オーストラリア人の言葉が果たして気候の影響だと判断できるだろうか。オーストラリア人は子音の場合は英国人と変わらな

沢田敬也他訳「オーストラリアのことば」(1) PP42-43 (2) P45 (3) P46所引

い。

l や h の音が消滅することがある。例えば、only [ ʌni ]、half [ a:f ]、although [ ɔ:əʌu ]。古くからアクセントは遅いリズムとして見られていた。しかし、アメリカ、やイギリス人と比べても平均的には決して遅くはない。

言語は常に変化しており、発音は変わりやすいものである。これは一つの例であるが、同じ [ ʌ ] でも、アメリカ的な [ ʌ ] とオーストラリアの [ ʌ ] との違いを認めざるを得ない。これは [ ʌ ] が中央母音化されるか否かによる。主として言語分岐によるものである。

教養あるオーストラリア英語と一般およびブロード・オーストラリア英語との間に見られる一定かつ体系的な相違は、とくに母音核 (vowel nuclei) の質的相違は、起源の相違によって説明できる。これらが共通して持っている特徴は、オーストラリアで発展したことを示唆している。特徴的なリズムおよび抑揚は、ブロード・オーストラリア英語の方が、教養あるオーストラリア英語よりも発達している。こうしたことの総ては推測でしかないが、それぞれの異形がその発展の途上において他に及ぼしている影響がある。

ヴィクトリア州ギーロングの女子大学長であったサミュエル・マックバーニー氏 (Samuel Mcburney) はオーストラリアの言語を広く観察研究した。彼は明らかに、『良い言葉』と『コックニー方言』という二つの基準を用いて考えている彼は、コックニー方言の主な特徴を次のようにまとめている：

( 1 ) 帯気音の省略と、時折見られるその間違った挿入。( 2 ) singin' や shillin' のような ing の省略。( 3 ) fate における a の改変。その結果はほとんど bite における i に近くなる( 4 ) hope における o の改変。その結果ほとんど how における ow に近くなる。( 5 ) cow における第一因子の改変。その結果 kyow または caow [ kjeú , kæú ] と書かれる。( 6 ) 母音の全体的な引き伸ばし。その結果

として dog は dawg に、coffee は kawfy 等となる。( 7 ) 母音の間の r の挿入。例えば I saw-r 'im となる。

オーストラリアおよびニュージーランドの一部では ( 1 ) , ( 2 ) , ( 7 ) は、英国のあらゆる地方で見られるのと同様に頻繁に生じている。( 3 ) , ( 4 ) はオーストラリアでは良く耳にするが、ニュージーランドでは滅多に聞かれない。( 5 ) は、オーストラリアでは殆ど日常化している。2重母音の最初の部分は短くなっていることが多く、したがってそれを固定するのは困難である。通常の英語では、ow は sofa の a、nut の u、または father の a で始まり、woo の oo ( eú , əú , ú ) となって減衰していく。オーストラリアでは cat の a、または get の e で始まり、それが延長される ( æəú )。短母音を引き伸ばす傾向は、オーストラリアの一部およびタスマニアで顕著であり、ha nd、da ug ( hææd、dAag ) となる。オーストラリアでは、food、school、room における oo が奇妙な発達を遂げているのが観察され、実際の音にはフランス語の eu に似たものが導入されて、[ əún ] または恐らく [ œúú ] のような2重母音を形成している。

オーストラリア英語がどのようにして発展してきたかは、町の言葉 (Town Speech) にある。囚人および初期の入植者の大部分 (ある推定では、一人に対し四人の割) は、町の出身者であったことは Sir Keith Hancock の著書 Aus-tralia でわかる。その中で彼は町の住人は、brook (小川)、glade (林間の空き地)、glen (谷間)、dale (谷) などの言葉を使わないだろうと指摘し、羊の飼育や農業に結びついた語彙の多くが減ってしまったのは、町からの入植者はたとえそうした言葉を羊飼いなどから耳にしても、総てを記憶することが出来ず、一般的な用語からなる基礎的な言葉へと切り詰めてしまったからである。

イングランド、スコットランド、ウエール

ズの多くの地方のさまざまな言葉の特徴がオーストラリア英語には含まれているが、いずれもイングランド東南部およびアイルランドから発した要素から比較すると小さなものだったと思う。絶えず相互作用を起こしながらオーストラリアで一緒になったのであるが、イングランドでは決して起こっていない。オーストラリアでは人の移動が絶えず行われて行く中でオーストラリア英語が発展していったと考えざるえない。オーストラリアの歴史を見ると、ある中心地が発展し、国内各地から人々が集まり、大きな人口に膨れ上がり、その後たちまちのうちに衰退して分散していくのはきわめてありふれたことであった。こうしたなかで、社会構造それ自体の流動性があり、これがオーストラリアの言葉の発展要件となった。1830年代にはオーストラリア英語は成立していたためゴールドラッシュ後という見方は確かではない。アメリカでは植民地出身の人間と新規の移民たちが、言語的に相互作用をもたらす集団を含んだ流動社会の中で一緒になった。こうした人口動態上の条件によって、現代の一般アメリカ英語が生み出され、一般オーストラリア英語が生み出された。しかし、オーストラリアの入植地ではさまざまな英語のスタイルが成立するというアメリカ植民地のようなものは存在しなかった。

オーストラリア英語の均一性、すなわち言語的に一様な言葉話すのがオーストラリアである。オーストラリアの教師は言語の形式に大きな相違があることを気にしない。彼らは、はるかに単純なパターンを用いている。英国とは違って音声、語彙や語形上の相違はない。オーストラリアの若者にとって、両親や仲間の言葉を真似ることで学んできている。しかし、アメリカ的な単語及び語句の借用は広くある。一般にオーストラリア人は、アメリカ的な語句をアメリカ的な抑揚で話している。たとえば、Cheero という別れを告

げる表現は、Good-bye と同じアメリカ的に発音されている。特に最近、オーストラリア人の家庭にアメリカのテレビ番組が毎日登場しているということは確実にアメリカの影響が強められていることである。

## 1. 語彙

特徴ある語彙としてあげることができるのは18世紀入植以後のもので、主に話し言葉としてつかわれてきたものばかりである。その特徴ある語彙の多くは日常生活に関するものであり、話し言葉のレベルで俗語表現の中に、使用範囲を拡大したりして、現在に至り用いられている。

英米人がオーストラリアにやって来ると、その違いにすぐ気がつくという。そこで、イギリスやアメリカでは使われない語を拾ってみる。

### < 日常生活語彙 >

- arvo (午後)
- bickies (お金)
- beaut (素晴らしい)
- bloke (奴)
- crook (よくない、病気の)
- cuppa (コーヒー、紅茶)
- dinkum (本当の)
- cobber (仲間)
- full (酔っ払った)
- cross (不正な)
- sheil (女)
- station (大牧場、農場)
- smoko (休息)
- snitchy (不機嫌な)
- tinny (幸運な)
- jimbang (激しく)
- flaming (途方もない)
- fossick (金儲けの種をあさる)
- goodday (こんにちは)

nugget (小さな人・動物)  
<アボリジニ原住民からの借用語>  
budgere (すばらしい)  
budgerigar (セキセイインコ)  
boomerang (ブーメラン)  
cobra (頭)  
dingo (野犬)  
humpy (小屋)  
kangaroo (カンガルー)  
koala (コアラ)  
wallaby (ワラビ)  
wombat (ウオンバット)  
womerah (投げ棒)

アメリカでは使わないというものの中に、イギリスで使われるものもあり、その逆もある。正式レベルでの単語は少なく、口語やスラングが大部分である。

## 2. イディオムとスラング

オーストラリア英語の発展について考えておかなければならないことは、オーストラリアに最初に来たものたちは、イギリスとはまったく異なる荒涼とした新天地だったことである。人々は教養のない、下層階級の人々であった。彼等と共にやって来た兵士すらも同じ下層出身者で、彼らの話す英語が標準的階層方言でなかったことは推測出来る。つまり、オーストラリアは元はこのような英語からはじまったのである。故国を遠く離れて初めて見る動植物や過酷な自然現象などについて、彼らの中にこれらを正しく命名できる学者はいなかった。そこで彼らは思い思いに名前をつけた。今日オーストラリアとイギリスで同じ動物や植物が違った名前では呼ばれているのはこのためである。今日のオーストラリア英語への発展は移民のごく初期に始まったと考えられる。オーストラリアにやって来た移民たちは独特の語法や語彙を懸命に吸収した。それが『第五大陸におけるもっとも生氣

あふれるスラング』とされている。19世紀末から20世紀初期にかけて愛国的風潮から、文学作品にも盛んにオーストラリア英語が用いられるようになり、第二次大戦以前までにはイギリス英語とは違ったオーストラリア独特のイディオムが確立されるに至った。オーストラリアの学者 Sidney Baker がその名著 *The Australian Language* (1996) に『わが文学におけるイディオム』として掲げたものが、今のオーストラリア英語への評価となっている。そこでオーストラリア英語とスラングを形態的に見ると、次のような特殊な形が観察される。

### 1. 親しみを表す接尾辞 (familiarity)

単語の語尾に *-ie*、*-y* や *-o* をつけて親しみを表す俗語を作る。標準語につけることもあれば、短縮したものにつけることもある。

例えば、

footy (=football) righto (=all right)

### 2. 短縮形 (shortening)

アメリカ人によると、アメリカ英語には短縮形があふれているが、オーストラリア英語にはとてもかなわない。彼らの英語はしゃべる速記 (Verbal shorthand) と呼ぶのが適切であると言う。確かに短縮形はあるが、彼の言うほどではない。

例えば、

cuppa (=cup of tea)

### 3. 押韻スラング (rhyming slang)

元来 rhyming slang はイギリスのものであったが、オーストラリアでは第二次大戦の頃盛んに使われた。2語からなる言葉を、一語の意味に使う場合が多い。よくある Captain Cook の Cook [kuk] と look [kuk] の韻をふみ look としているのは有名な話である。オーストラリア特有のものを分類してみる。

## ( 1 ) 体に関するもの

- a . bundle of socks ( = think box ) 頭を表す。
- b . new south ( = mouth ) , New South Wales 州の略語。口を表す。
- c . Melbourne pier ( = ear ) 最も格調ある都市。耳を表す。
- d . Barney fair ( = hair ) ロンドン北部の自治区、barnet の定期市に由来する。髪の色を表す。また、here and there とも言う。アメリカでは chair の俗語として使われている。
- e . Onkaparinga ( = finger ) 地名で、onka とも言う。指を表す。
- f . Ned Kelly ( = belly ) 有名な強盗の名前。下層階級では英雄となった。お腹を表す。
- g . Lewis and Witties ( = titie = breasts ) 1920年頃から普及。胸を表す。
- h . fried eggs ( = legs ) アメリカでも使われている。足、すねを表す。
- i . these and those ( = toe or nose ) 爪先と鼻の両方を意味するがどちらを指すかは前後の文脈で判断する。アメリカでは clothes ( 洋服 ) のことを表す。

## ( 2 ) 身につけるもの

- a . this and that ( = hat ) 特にアメリカへ広まった表現。帽子を表す。
- b . big and hit ( = shirt ) 汚れていないシャツを表す。また the Jimmy Britts とも言う。Jimmy Britts とはアメリカのボクサーのこと。
- c . daisy-roots ( = boots ) 南アフリカやアメリカでも使われることがある。ブーツを表す。
- d . Jackie Lancashire ( = handkerchief ) Lancashire はイングランド北西部の州。ハンカチを表す。

## ( 3 ) 食べ物・飲み物

- a . babbling brook ( = cook ) 特に軍隊や未開拓の奥地での料理を表す。また、crook と韻を踏むことから、詐欺師の意味もある。
- b . Gunga Din ( = Gin ) ジンを表す。また、chin ( 顎 ) としての意味でも使われている。
- c . squatter's daughter ( = water ) 水を表す。Gunga Din and Squatter 's daughter 水割りジン。

## ( 4 ) 人に関するもの

- a . china plate ( = mate ) 仲間を表す。china と短縮して使われるこの言葉は心から親しい友達の意味が込められている。
- b . cheese and kisses ( = missus ) cheese と短縮されて用いられている。奥さんを表す。米国にも知られている語。
- c . Jimmy ( = immigrant ) 移住してきた人を表す。immi と略して、オーストラリアでは新しく移住してきた人々のことを呼ぶ。
- d . Tom Tart ( = girl ) sweetheart と押韻している。女の子を表す。
- e . Charlie Wheeler ( = sheila ) 女の子を表す。元来は sheela と言い、アイルランド女性の総称的な名前であった。ちなみに、男性は paddy。
- f . Mark Foy ( = boy ) 19世紀後期のロンドンにあった運送請負会社の名前。男の子を表す。
- g . mutton flaps ( = Japs ) 日本人を表す。第二次世界大戦中、オーストラリアの軍人たちの間で流行した軽蔑した言い方。
- h . dink ( = chink ) 中国人を表す。chink は chinaman のことで、一語そのものが韻を踏むものを使用する傾向のある現在のオーストラリア人から生まれた。

- i. septic tank (= Yank) アメリカ人を表す。米軍軍人のことを army tanks とも言う。第二次世界大戦中の捕虜の間で流行した。
- j. John Hop (= cop) 警官を表す。イギリスで言う copper よりアメリカ英語の cop が使われている。
- k. Sydney Harbour (= barber) 床屋を表す。
- l. kangaroo (= screw) 刑務所の看守を表す。

### 3. 文法

イギリスの学者が教養あるレベルで比較した場合、オーストラリア英語とイギリス英語との間に存在する顕著な文法的差異は、きわめて僅少であると述べている。しかしながら、細かな点で、特に口語レベルではイギリス英語とはかなり違ったものが見られる。

#### (1) 代名詞の特殊用法

- (a) she: 標準語では it というべきところ、she を盛んに使う。概して好ましいことを表す。  
例: She 'll be right.  
(万事オーケーよ)

- (b) us: 非標準的用法であるが、me の代わりに us を用いる。  
例: Give us a beer.  
(ビール一本ください)

- (c) 二人称複数の yooze, you(e): you に単数、複数の区別がない。オーストラリア英語では非標準的用法ながら、you に-s または-es をつけて複数にする。  
例: What 're yous doing?  
(何をしているの?)

Where are you going?  
(何処に行くの?)

#### (2) 文尾に置く but

標準語法とはみなされないが、接続詞 but が文章の終わりにくることがある。

例: It 's a sunny day: cold, but.

(日差しがあつていいね、すこし寒いけれど)

#### (3) 劇的現在 (dramatic present)

英語国どこでもあることだが、過去形にすべきところを現在形で言う。

例: I go to school, my teacher says, study hard.

(学校に行ったら先生もっと勉強しろだつてさ)

I'm there to get it.

(私がもらいに行ってきました)

#### (4) 仮定法過去完了

標準文法で、例えば、If I had done . . . とすべきところを、If I would have done . . . とすることが多い。

例: If I 'd 've waited for the police, those kids would 've got away.

(警察の来るのを待って、何もしないでいたら、子供達は逃げてしまっただろう)

#### (5) 代動詞の省略

助動詞を伴う代動詞 do はオーストラリアでは省略する。

例: Have you read it?

Yes, I have (done). 下線を省略する。

#### (6) 冠詞の省略

文頭で不定冠詞と定冠詞が省略されている。

例: Man could easy get cold.

(人はすぐに風邪をひく)

Only thing you caught was a cold.

(あなたがかかるのは風邪ぐらいのものだ)

#### (7) 同格の多用

会話ではよく用いられる同格 ( apposition ) や外位置 ( extraposition ) はオーストラリア英語の特徴ともいえる。

例 : Your mate, Mike, I met him at the department.

(君の友達のマイクとデパートで会ったよ)

#### (8) 特徴ある語句

all : 若者は次のように言う。All those letters didn't arrive. (手紙はなんにも着いていなかった)

本来は None of those letters arrived. である。この表現は年老いたオーストラリア人は使用しないが、all にストレスを置くと、Some of them arrived and some didn't. (いくつかは着き、いくつかは着かなかった) となる。

Bloody : オーストラリア口語英語で非常に頻繁に用いられる。この形容詞には、嫌悪、怒り、いらだち、などの感情表現である。

『すごい』『たいへん』などの意味で、強調語として、また副詞として用いられている。例えば、bloody big とか bloody nice などと言うのは口ぐせである。オーストラリア人としての誇示なのかもしれない。

例 : He looks bloody strong.

(彼はめっぼう強そう)

When I'm bloody talking, you shut up and bloody well listen.

(わたしがしゃべっている時は黙ってよく聞け)

特に男同士の会話の初めから終わりまで意味のない bloody を用いて話す。イギリス人は用いないが、彼らは代わりにもう少し柔らかい表現の ruddy を使う。

例 : You ruddy fool!

(この大ばか野郎)

ところで、この bloody を The great Australian Adjective (オーストラリア的形容詞) と彼らは呼ぶ。アメリカでは fucking を米語として使うが、下品なため fucking が bloody にとって替わる傾向がある。又、オーストラリア人が発音すると同じようにつづいたものを Strine と呼んでいるが、この語も数多くある。

Strine とスラングは異質であって、実際にそのつづりどおりに発音されているものと誤解されている。

teams : オーストラリアではチーム名は単数が複数両方ともありえる。

例 : Collingwood is doing well.

(フットボールチームコリンウッドはよい成績です)

Colling wood are doing well.

しかし、イギリスでは、チーム名は必ず複数である。

Liverpool are doing well.

my same : オーストラリア人らしい表現の一つに、

例 : Can I keep my same phone number if I change address?

(住所が変更しても同じナンバーにしてくれない?)

この場合は my same などと言わず、



本来は the same である。

mustn't: 多くのオーストラリア人が言うのは、

例: She mustn't be in; the lights are all out.

(彼女は中にいるはずはない。  
灯が消えているから)

しかし、She can't be in. とか She must not be in. とするのが普通である。

usedn't to: 南オーストラリアで耳にした表現だが、次のような表現をしている。

例: I usedn't to like beer but now I do.

(昔ほどビールを飲まなかったものだが今は飲むよ)

これもオーストラリア英語の生き残りかも知れない。

may と might: オーストラリア人でなければ might を使うのが当然である。

例: This may have happened,.

(この事は起きたかも知れないが) よく耳にする表現に、  
Mandy said that this may happen.

(マンディーはこれは起きるかも知れないと言った)

could と might be: オーストラリア英語においても、会話の中で省略が見られる。 maybe は完全に副詞化して文頭、文中、文尾に来る事が可能であるが、 could be, might be は文頭に来ることしか許されない。

例: Might be 'e likes cookin'.

(もしかして彼は料理をするのが好きかもね)

Could be he's never caught a fish in' is life.

(ひよっとして、彼は今まで釣りをしたことがないんじゃないの) Could be. (そうかもね)

different to: different の次に to をつけて用いるのもオーストラリアの特徴である。

例: Adelaide is very different to Perth.

(アデレイドはパースと異なっている)

イギリス英語であれば to でなく from である。しかし、アメリカ英語では than を使い、次第にその使用が増えている。

irregardless: この語は irrespective and regardless との混合語である。

例: Irregardless of what you think, I'm going to do it.

(あなたの考えが何であろうとも私はそうするつもりです)

この表現は特にオーストラリアでは珍しくもないが、アメリカでは珍しい。

as well: カナダ人同様にオーストラリア人は As well で文章を始める。

例: As well, there are three other problems.

(更に三つの問題があります)

as such: 若者達は頻繁に as such を使う。

例: The building's locked; as such, we can't get our things.

(ビルに鍵がかかっていて、私たちのものがとれない)

この as such は so や therefore の代用である。

you(e): you の複数で使われている。

- 例 : Where are you going?  
 (あなたがたは何処に行くところですか?)  
 What're yous doing today?  
 (君達は今日は何をするの?)  
 中世になって you が単数にも使われるようになり、現代では単数の区別がなくなった。オーストラリア英語では you に s または se をまた、ze をつけて目立たせている。
- apples : オーストラリア人は良いものの比喩に使う。良好な、順調な、の意味で形容詞として好んで使う。  
 例 : She's apples.  
 (万事オーケー)  
 She 'll be apples.  
 (心配無用)  
 なおこの She は it や everything の代用であり、オーストラリア英語の特徴でもある。
- beaut : 形容詞としてうまい、名詞として素晴らしい、立派なこと、などを表わす。  
 例 : This beer's beaut!  
 (このビールはうまい)  
 Everything was beaut .  
 (万事うまくいった)
- bloody Oath! : 同意を表わす感嘆詞。(それはいい考えだ!)  
 また、bloody Oath に似た表現で同意、肯定、保証などを表わすものに too right (そのとうり、よろしい) や no risk (そうしよう、心配するな) などもオーストラリア英語の特徴である。  
 例 : No risk, mate.  
 (心配するなよ)
- but : と like : 文尾に置く表現も特徴である。  
 例 : It's a sunny day; cold, but.  
 (日差しがあっというね、寒いけど)  
 It's a bit tough, like.  
 (いわば少々難しいかもしれないね)
- go : 名詞、形容詞、動詞としての特徴をあげてみる。  
 例 : 名詞として、  
 We are prepared to give it a go.  
 (我々はそれをやってみる用意はできている)  
 形容詞として、  
 All systems are go.  
 (全て準備完了)  
 動詞として、  
 Watch out for that dog-he'll go you.  
 (あの犬に気をつけろ、かみつくよ)
- How's about we..? : 相手を誘ったり、意見を求める言い方として、オーストラリアでは、How's about we....? や How's about ...ing? の表現がよく使われる。比較的若若男女が使い珍しい語法である。  
 例 : How's about we go to the pictures later?  
 (あとで、映画に行こうか?)  
How's about knocking off work?  
 (仕事を切り上げようか)
- us : 例 : Give us me bickies.  
 (俺の金をよこせ)  
 この us は me の意味であり、オーストラリアの俗語では、しばしば me

の代わりに us が用いられる。次に me は、所有格 my のことである。彼らは（イギリス人も）友人同士のくだけた会話では my を [mi:] と発音することがしばしばある。そのように発音していることを表わすため me とつづることがある。例文の me はそのようにつづられた my である。Give us a beer. (ビール1本ください) と飲食店で聞くと、いかにもオーストラリア的であると思う。常に命令形に用いる場合、Give me... と言わない。

right : 形容詞として、間に合っている、在庫品などが十分にある、という意味に用いられている。例えば人を主語にして、

例 : Are you right for supplies?  
 (必要な物は十分ありますか)  
 We are right for all of them.  
 (みんな間に合っています)

too right : 同意や肯定を表わす感嘆詞で、意味はその通り、そうとも、よろしい、などの意味として頻繁に使われる。

例 : She is a beat drop. "Too right!"  
 (うまいビールだね)

she : オーストラリア英語では it や everything の代用として頻繁に用いられる非人称代名詞である。一般に好ましいことや天候を表わす it の代わりに使われる。

例 : She was a good little pub.  
 (あそこはほんとにいいパブだった)

too : オーストラリア英語では、実際に

(indeed), そのように (so) という意味に使われている。しかし、オーストラリアの辞書によると、強調の too であると言う。

例 : If you don't keep your promise, he'll break your neck. Yeah, he might too.

(約束を守らないと、彼はきみの首を折るよ。うん、彼ならやりかねないな)

your : 二人称所有格の意味を持たず、単に冠詞 [ə(n), the] のように使われることがある。

例 : She is not your typical librarian.

(彼女は図書館職員タイプじゃないんだ)

Not your quietest place, is it, Pitt Street?

(活気のあるところだね、ピッツ街は)

#### 参考文献

- Sidney J. Baker, A Dictionary of Australian Slang: (1982)  
 G.A. Wilkes, A Dictionary of Australian Colloquialism: (1978)  
 Collins Dictionary of the English Language: Collins London (1979)  
 Don Anderson, Contemporary Classics: (1995)  
 Wright, J., English Dialect Dictionary: (1970)  
 Colin Boweles, G 'day! Teach yourself Australian: (1991)  
 Heinemann Australian Dictionary: Heinemann Educational Australia (1976)  
 Sidney Landowne, JO 'Grady, Aussie English: (1966)  
 Longman Dictionary of Contemporary English: Longman, London (1978)  
 Macquarie Dictionary: Macquarie Library, St. Leonards, N.S.W. (1981)

- Morris, E.M. A Dictionary of Australian Words, Phrases and usages ( 1898 )
- R Bailey, English as a World Language: London, Cambridge ( 1982 )
- Sidney J. Baker, Australian Language: Melbourne, Sun ( 1982 )
- Sidney J. Baker, A Dictionary of Australian Slang: London, Routledge ( 1982 )
- Sebido 's Dictionary of English Linguistics: Seibido, Tokyo ( 1973 )
- Backett Richard, The Dinkum Aussie Dictionary: ( 1987 )
- Leine Johansen, The Dinkum Dictionary: ( 1987 )
- Pam Peter, The Cambridge Australian English Style and Guide: ( 1966 )
- The Great Aussie Slang Book: Eric Spilsed ( 1998 )
- W.S. Ramson 「改訂・オーストラリアの英語」 沢田敬也他訳 . オセアニア出版社 ( 1987 )
- A.G. Mitchell 「オーストラリアのことば」 沢田敬也他訳 . オセアニア出版社 ( 1998 )
- 沢田敬也 「ニュージーランドの英語」 オセアニア出版社 ( 1998 )
- 沢田敬也 「新オーストラリア・ニュージーランド英語中辞典」 オセアニア出版社 ( 2001 )